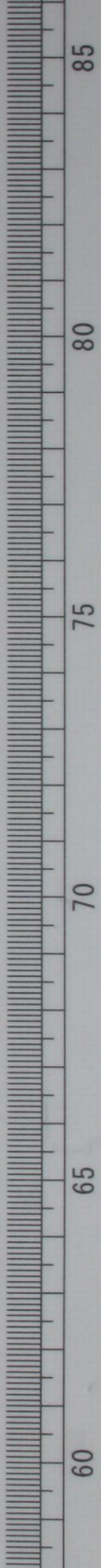


俳諧文體考
完

5
4441



4441
昭 和 5
4441
昭 和



俳諧文體考

文者貫道之器也。と云やされハ文の強
くある今の俳諧も道の強れ又弱く
一 道者 柝 諸心 著 事 意 托 文 以 示
示ときけハ其の秘さきと交詩款ハ待款乃心
仇強々々ハ心あらんさるる中ハ欠徳宗周
乃心あきハ桃妻り発句を志る不志り叢句不

昭和九年
十月二日



さて後不^レ文作^ル一^ク其^レ不^レ之^レ而^レ未^レをさ
ゆん^トとまるとも^レ以^テ屈^クらま^キ積^テ詩^ヲ為^シ文^トと云
如^クある^ニ一^ク志^スる^レ今^ニて世^ノ或^ク門^ノの文^ヲ入
つ^クときハ元^ノ源^ノの昔^ニ乎^シ流^レ楊^柳林^ノのま^ニ入^リ
の作^ル文^ヲ世^ノ不^レとそ^レを^レやま^レと^ク其^レ流^レ其^レ碩^ク自^ラ笑
也^ト松^葉采^ルの和^漢の第^一文^ヲみ^おと^ろき先^ニ入^ル其^レ習
わ^らむ^る事^ヲわ^らむ^る不^レや^ま来^抄曰^ク先^師云
世^上のものを^レの^レ又^ニ章^ヲを^レる^に或^クハ漢^文を

能^ク不^レ和^クけ^テ之^レ和^漢の文^章不^レ漢^字を^レ入
句^ヲ和^ク一^ク和^ク一^ク云^フ一^ク或^クハ人^情を^レ云^フ
て^も今^日のさ^う一^きく^はく^を探^ルと^とめ
和^漢の^漢ま^一く^下ま^る安^ら乎^シ永^流の文^章ハ
た^一く^レ和^漢を^レた^テ文^字ハ^たと^ハ漢^字を^レ
と^とま^ると^と和^漢を^レけ^テ云^フ鄙^語乃^レと^と
及^ふと^も和^漢一^く云^フ一^と也

○^レ和^漢ハ^大家^也其^レ門^人ハ^古磨^と乎^ト方^ハ通^俗志

の依者負九の東武不之盤谷奮室蒼孤
左心原逸志のこい
流と元來宗因流也といひ芭蕉流乃軍と
活例の門母好ふ志かういふは延喜天知力
むつうき句のそ檀林とおのひ檀林流のそを
負享より及ぶるうのそせ成流同くして其申
不檀林とそ流の希るる世ハ多分其風あり
檀林物とそたうらんやあきう成る世とそ
とやまをある一敷句流をまらけ一今や
此門不和漢の文士多り其ハ文章卓ハ程更芭蕉
乃文章小心をとめきまハ当流と此門のそち
ある事とそる一くやらん

○昔本韓柳之文法其後專原于宋
朝之坡谷等文法とくや志くれハ時代く
の變風をそハるるも芭蕉門りふとそせ成不
とそらくしきみや

世一蕉の文章乃變風ハ葦白附合イ變風之
如くある一ト世成及の小文お云ともく道
乃紀と云物ハ紀氏長明阿佛の匠乃文をよひ
情をそいでる中解を皆面新似りよひく其
糟粕を改むる半何とい匠よりして淺智經文
乃筆イ及極くも何れハ○又云黃奇蘓新の
くくひ不何くまハハ何れと云く何れと云
小黃曾直蘓亦ハ坡文法を變を忘れく變

まききの例何れと云と經文何イ及ぬと謙退
まらふ風を變するの心とハお一とくくく
及の小文のころみや情味寂照新氣是方一の文
何りつと會集イ出きて其文中云

ハ度ハ極く端愛さぬくハ熱情ハ此也
此礼節中そのいをゆるる意ハ風俗改り極く
心せぬハ再みさる一き中のもつ人こうり
され在風俗を極く改りし程新氣令志

くく此形又思古よりし下畧

霜月廿四とあり又蓮二つ白ねく裾なる也此一
佐七舟水りぬ武極隣を故孫に文福を
裾られい中定る芳地紀行を草寫し終る
岩菊丸とありともふくてもふくい芭蕉を
移す毎と云々月記といはる小瀬治方中
きいふる世篇を故孫一格に文法ふる
より何卒此及なりくい紀行を急世終る

可給山下畧

て世戎の書巻ハ貞享四年より云ふ乃
一併改るの建蓮二つ此巻を同一年より
文法地門と同一格の建るなり
此巻不右人なりと芭蕉のいれハ数句謝合の
いふ所より云ふの文章亦も右人なりとや
いふ人いふ所の此巻文章ハ詩歌の情事より
上根上員の教ありくまを右人なりと新

その中下の抱ひしるすよせ心をのちるまれ
と信後不疑まらうふるをうーとやせん其平
信しも中間の二理ある事をユませんとまら
きや

さき母のふとく去来抄不我信の文章ハた
ーの信念をたてよとの教又葛の松原イ
其角白一句の姿たーうらぬハ純向のみき
るを口先あてまきらーなる故くとそハ句

の事られと文章もい心ふるーの南董の
短りきより後世長篇とふるもみーうくて心
のやみの迷つくされを次母母何教多くあり
なる母やとふおも十七字のくひつくされ祿ハ
やむとをゆき文章とふるとおりのハ長く
せく叶ぬ時ハ捨不洞の花を六のてて長き
ハをゆるふ乃が念母をゆるさるー文
藝也 道德實也 篤其實而藝者書

之華則愛^云又云為文不門世教
雖工何益

と世政菴施^喜八延宝初小东武下向天和二年
冬甲列一仍望之三年又东武小貞享元年冬
上方一仍以^居东武小居^半凡十年其後貞享
元年より二年と上方仍御夏东武一下向日四
年冬より元禄元年と上方仍御以^居东武一
居^半十三ヶ月迄元禄二年去より奥州仍

御よりと方母居^と日四年冬东武一下向日
七年夏上方仍御一^て卒^と以^居东武一^居
半二年と六ヶ月迄より去^れ八^は戸住居^の
門人延宝天和の風潮^{あり}八^は十年^{あり}と
貞享^年八^は十二ヶ月と元禄^年九^は二年と六ヶ月
乃^は通^り乃^は通^りあり^と一^は上方^は八^は延宝天和^を
皆^く貞享^年八^はヶ月迄と去^れ十年^迄の
有^りあり^と一^は夫^れより^は旅^中あり^と而^も會^も少^しあり

つらん元祿二より後を石山初任彦不居て候
候おもを志をらくく匿居又七年不も西舎あり
て九二年社の終りあり一若小まゝの安乃
祭句附合まゝもやび一文章ハ稀まれハ程文
まゝまゝ一

芭蕉没して十年乃後宝永元年許六風
俗文選を始て選ま其序に去來曰世一
能潜の文あつてく言集といふものいまいひま

先師一とひ思ひまゝなる中納言と心よりあふ抱
希まれハむま一くやまぬも十とせ余みとせ
あるらん今や風雅不振ふくもおのれは友城不
型を横と文場不碍をふるうものかゝる
お考ふるふをせ残るうくの文のふふ叶ふ抱端々
又ハ門人の文のふふやまらるか一抱る不横平
樂とあつる集一許六より治天久遠なる遠地の
不あつる中不懐昔集集の下書去來第一冊

是ハ極美撰リ付文章在加入ト云キ
極リ以テ其角ヲ未だ純尚白ク送越人席
文章所一キレよりむる一く止子あると見え
よりされとも勿後菴記ハ入るを云ふ
許六の風俗文選白ねの本朝文選和漢文操
の身ともうさう一きるゆり先キもゆふ
とく享保二年白ねの本朝文選を著すと記
芭蕉一ノ中紀ヲ始テ終リガ如クト世哉

の文母と稱一志るを其後を世哉を志るふ
との多く法家子残るる句も文を梓行不
仍其書傳てて其一風の起りるを知る不
あや服をつけてそふ人あらん不ハ後世を知る
極きハけりあらん

芭蕉門下不もて世哉没後ハ各句不流仍と
ゆふとく文章も亦さふくあると云ハん
あらん博観約取科別其條欲得句

法者譬如望洋向若不測津涯或
披砂揀金

篇實難陳尔去耳曰法式を云んハハツツハ
之ノ一先師おふ一古法を破り新式を定め
終不半ハ制を云ふきを云むらめて句不秀
句多うらんを斗終あり然も古法を不
まを云ふに破りぬらふ一と云ふも考
るハ是ハ筆且之相表合の事と云ふれ一併

を世故の念ゆけられた文章も其心めて法式
格式の安き方いよと云ふや

芭蕉門下ゆく文章の他念なく其
家其流其書の尚流の念なく叶ハるを志
なく其紀行其序書えと云ふ所なく
風雅な竹ふとくハそを平活不書
むつりききやふきや

和歌連歌の文章ハ技又采拾系不君羊書類取

又る一―挙白集は世戎の句少と文章不
とせりるとおわゆるも同じの事と別る
又る一―きりり能階文章自徳宗因乃文其
流の達人の文の事とと流と不教と一と
集物多れハ尼安つる四五とをりも見て知る
つくさもろくそハ芭蕉の文ハ一―なる所
くちり―

能文柄ハ漢文を交ゆるハ書安く和弁の文
を交ゆるを多くハ流遠を物なりとせりい
りさぬれもなり―其身字文ハるれと圓様
活法玉集集のこまひより拾ひ出―回を合
まれば知らぬ者をおとろり―安―和文不々
手短なる書か―其杖の枝折と烟のこめく
半の利丹後利ろくませめてハ美茶茶今國
類抄遊月抄春暎抄流松草大成ろくりて
見く和款をもち―よまされハ右邊も多り

る一

文ハ三つろ書々々自をいま一むるをちき
と多くハ他一見まゝ物なれを文のおわ一
ろろらさるんよりハふのあ一ろんを恐る
ゆ一物あらぬハ知らぬ一たをれ物知りハ知る
一たをれてまゝハ自己の能ハ一て芭蕉彦
とハ門達しるる一柳宗元曰文之用
令襟衣賤導揚諷諭而已

文章の書法を教の書能滞ふるを
白れ始て中於文遣を何うハ其志を多
強めく安くハ其れハ甚難名不令又考る
文を加ふ其意ハ本をわくせんとらるなり

文鑑題註

歌

氷川詩式永言謂之歌亦曰放情
曰歌也歌行相似也

詩

詩經序人心之感物而形言之餘
也親名詩者之也或ハ詩と歌とハ風雅

の身一とまゝの物ありて法格ハ本より嚴重也物
をて文送るゝとの邪之ありて亦行曲吟乃類
より引も辞も詩の類の中其教在る所其も
世名の物より出く物よりと變化の所を知る
一をむ物欲の表影ハ細流まゝる不及ま

翠考ふる本物一欲ハ二條冷泉に於てハ
正親町家未得ト養良近くハ油櫃斎一
よりてその一むく僧名の物重を世成也

行

のまゝと知らまゝ二十一字の欲を風俗文送不
出されと教となく又是をすゝとせるやま
やを世成の心よりちゝとれハいふももまゝ
一ゝゝ

詩人玉屑体如行書曰行文選音
美行曲也

或ハ欲と物も先ハ相似ゝる物と知るゝ一詩人

玉屑もお柔く欲はととたり去れと水
川乃式ふと言を永一情を放ちてさのそ
法格を定めまともんゆまハ或ハ長短乃句
拍子あらんハ但世於の中間ふ君不見るを
ゆる短格なりて樂府の常格なりと短せり
詩よりも法致を省きこれハ倭文ハ一併と
なりんがより和歌と短しと子及と

翠平考ふに詩人玉屑ハ守法度日

詩載始末日引體如行書日行
放情日歌兼之日歌行悲如蛩
蟹日吟通乎俚俗日謡委曲尽
情日曲○ハ全文をりて詩より法
致の字りみきをゆふる○杜子美
ハ負文行ハ翻手作雲覆手雨紛
々輕薄何須數君不見管鮑貧
時交此道今人棄如土○是ホ

待の題名不してて世次の文母とふればハ
いささか拙り

賦

陸機文賦体物而瀏亮李註象夏
明白也

或ハ賦と記とも相似と多と賦ハ尚前の物を
書るゝて文法ハ風流をそゝ記ハ性才の起り
を記して文法ハ實體多と一但一賦也と

叶韻の法もつらん

要考ふ事文類聚云賦之所起
屈原始作賦既死之後楚有宋
玉唐勒景差之徒皆以賦称是
賦之所作自戦国始○文体明
辨云按詩有六義其二曰賦所
謂賦者敷陳其事而直言之
要考ふれば和漢文操ハ初任菴賦と題せり

ありてく文も様々の風俗文選ふるるとと
遠いて其は不花と實也被記といは紙を
見合まて——と有り又を解おも終の文章
の花実をそのやと有りハ賦花やうる
を一括とまて拈風俗文選の松永の紙を
見まハ此若人名未幾あつてそのまて是
志きの文ハいつきの中みも有りて支考り花と
つるものみも有りてされハ風俗文選不

あるま全くを世の賦と紙あせる抄冊や
うらハ——とまてく芭蕉の費句再安子と
感とる事多——文ハおひく細道と有り
ぬまて紙と紙せるもの文ハ——手抄らん
えまてもひふ——支考り花ある許と有り
那まて各癖とも有りハ芭蕉乃文も其
撰考りつれと質おもて文冊とるるとまて
ふり——是有り後見の紙とるる人のと有り

めりくハ史をゆく翠の幸と世人恒不賦と
題又せるハ續核よのれ支考々今霄賦の

吟

文選註吟猶詠也詩人玉屑悲如
蛩蛩曰吟也

或ハ吟と云内ハ物を感する所より文字不沉
思の次安らけて糸と物思歎息の餘るるハ
蛩蛩の強ハ吟の字をさへせり漢小白頭吟も

と倭不貧女吟と文法を但一秋の
るらん

好年考るハ文体明辨曰悲憂深
思以呻其鬱者曰吟文乃題名ハ
其文不らて吟とと書ハれと字彙不
吟ハ詠也又歎也と何と今とて句
をきく吟とハ詠嘆より出たるの句多
句一由く文ありく未ハ句あらん

吟とふ文作別不せんまきくあも及まーくや
文操不飲の歌不入くるおも知るくー

曲

詩人玉屑委曲盡情曰曲或古有
大堤曲

或ハ曲と云付ハ委曲不情をそまきとーと終ー
くまこと何の文章をり廉相母書くく委細不
情をそまき返ーき曲の字の終母を不棄く

倭不を源順ハ曲詞と有りく先ハ歌曲不迫き
物とを和歌不ハ四曲躰ハ曲を附るとふとッ
拍子ちり拍子より十二拍子と定て同脱とふハ
ハ拍子ふれハ漢ハ七短の句法とてハ等の唱
ふ奇不知るくまきとり

案考るハ曲ハ詩の樂府疑あくくさひわの
あれを支考も踊りくこの歌とーふれと和
歌をうくふハ勿論まで白拍子僅る樂も軽

借不風流ハ何カク俗流ヲ指スルコト
ハトモれヲ推松坊ウ物々ハ一々仙四等
色このふもろくしてまぬるるふハ
ハハ出まきもやも何カクもやうやんも
るまか

引

文体明辨大畧如序而稍為短簡
蓋序之濫觴也

序跋

說文序東西牆也盧曰次第之語
也彙跋足也私曰序之先後者也
或ハ引と序とハ長短の差別と經一と
序と引ハ各別の下るるて序引の差別を
いふ序ハ詩歌を先ふして何の詩歌と序と
ハハ引ハ詩歌を後ふして何の詩歌と
ハハ一但引の字ハ誘引勾引の義不て詩歌

の附情を誘ひ出せ心るる人既小文体的辨
小と引とハ唐よりハ後の歌名あり引と名る
義分明ありと委ハ引歌の下に注と
和云引ハ諸抄ハ分明あり去と詩發小似と
る物を序引と名へて注一これハ改して詩歌
を後小まるとする歌注の字義の意あり人
ハ故小侍人玉屑小も始末を載るを引といひて
彼小を侍引と名へ注せり然るハ義系乃題

名少とハ初赤人望不盡ハ歌一首并短歌と
ある時ハ前を伴と一後を引とせり去とと
長短の遠ひありと曰一前を二首つと録と
并小歌と名ふる人注くと長短の并二とハ
ゆ一と名ふと長歌を引と見て短歌を後小
ある時ハ歌小本初小も引の歌ありと是を
古今の文體と名さハ送者小一初の服力ありと
稱と一況や結文の詞を足るに云いつき人

富士の山と次の短歌といひける不思議小
序引の表格を兼て和漢真合の引とす

富士引

あつちのこれ一財不祥さひてきくが
こき波河あるや一の根をあまの系あり
さけんれはこころの影もかくろひてる月の
光も見えをきく空もぬきかへる時一
くそ雪はぬきたるかろつきひつきゆくむ

不そのまじり祿ハ

田子の浦はうち出るとれはま白をや一の
高根少きありある

翠草考 文體明辨云按唐以
前文章未有名引者漢班固雖
作典引然實為符命之文如雜
著命題用己意耳非以引為文
之一體也唐以後始有此體大

畧如序而稍為短簡蓋序之濫觴也若其名引之義難妄臆說俟傳聞者詳焉○蓮二つ説ゆゑるべしと辨みたり不穩況とさしと序又を世戎の文おも引の名は高ら稱とさる物り

翠考の序の○爾雅釋詁云叙緒也然則舉其綱要若繭之抽緒

○古文務式云序以序事貴直達○文体明辨云按序緒也字亦作叙言其善叙事理次第有序若絲之緒也又謂之大序則對小序而言也其為體有二一曰議論二曰叙事云又云或作叙惟作者隨意而命之無異義也云又曰小序者序其篇章之

所由作對大序而名之也

翠考ふる風俗文選不在世哉嘆野集乃

序を始母しく其角の積りの集の序を

のま白ね文選一風書り其袋の序を

始一並三序在る元祿三四年にして世哉

の圖を編する物と書るときくそ外を世

在世の集一何るや各序後在る合集

一又小序ハ始一小序何るふをゆるや序

遠集一何坡の唐辛の匂一小序と何り
文選出せる風書り其袋集の序

其袋序

ふふれとて天の袋何りあつゆる是

入物よりふおふくるといふと母の秘

う草とておるまゝとて父母近れとて

そら一きまゝ一袋のくまきめ一も

いふ忘まゝとて一袋の口もむま

流るるを不とする 虚言と清輔の名
たつるふいぢき我をつきぢりきぬ武士
尔不ぬ言ありる 誠小大言ぢり首ふけ
くる言ぬをいづる物を入るるをぢのふ
くぢとるや 春山暮月と李賀の巻小
おり一歌の言ハ光彦のひきまぢり言
それもゆゑおもかりん 為憲の言をぢ
らんをそれと息くぢりてむつり一室小

其言や花言もくる月のけさるうく
ひろひくるとぢめて 赤家の秘言
とまて言ぬもきせに 猫はもかぢせに
元禄三年のえ年のみふ月日 嵐言
えつり序き

は云せ序はぢりて 賦の作よりされハ序言
の二字を以て 俳諧の草格をぬせるるを和洋
不兼洋の言をいづる 漢詩并連俳のよか

らえや結語ハ秘義の二字を至て其末と猶
との虚誦ある例ハ文章の虚実を伝て
其城ハ其角嵐を其りといハ蕉門の人の常
語あるをや以上又證

翠考する母のまこの地を看破して莊子
不惠子ハ瓢の純なり花の志ありる月乃
とるかつくひろひとるとハ並くの草
之の及くまふなり

跋ハ文體明辨云按題跋者簡編
之後語也凡経傳子史詩文圖
畧之類前有序引後有後序
可謂盡矣其後覽者或因人之
請求或因感而有得則復撰詞
以綴於末簡而總謂之題跋至
綜其實則有四焉一曰題二曰
跋三曰書某四曰讀某夫題者

締也審締其義也跋者本也因
文而見本也書者書其語讀者
因於讀也題讀始唐跋書起於
宋曰題跋者舉類以該之也其
詞考古證今釋疑訂謬褒善貶
惡立法垂誠各有所為而專以
簡勁為主故與序引不同
考考其必序而後序也

後跋者おもむきて書く感ふより
因文而本を以て一人の情を以て書
く其詞を以て考へて其を以て
其の

謡

詩人玉屑通乎俚俗曰謡或曰民間之謡詞也或曰謡とハ世間の風俗亦不
レ々里民の謡を以て之と云ハ歎字と云

有于不八歌八琴此唱亦多之及是八為早乃
有也明多利欲八各別之

琴考之文体明辨云按歌謠者
朝野詠歌之辭也声比於琴瑟
曰歌爾雅云徒歌謂之謠韓詩
章句云有章曲謂之歌無章曲
謂之謠則歌與謠之辨其來尚
矣然考上古之世如鄉雲采薇

並為徒歌不皆稱謠擊壤扣角
亦可歌不盡比於琴瑟則歌謠
通稱明驗也孔子刪詩雜取周
時民俗歌謠之辭以為十五國
風則是古之有詩皆起於此故
通謂之詩至若國風以前歌謠
之屬見諸傳記不一而足雖未
必當時所作然亦有可採者及

考其別則有歌有謠有謳有誦
不歌日有詩有辭不特歌謠二者而
已云云○胡庭芳云以之爲琴瑟合
之於野人之三法亦合世以之爲謠
之於其又者何之乎三十一字之和歌
之於其又者何之乎三十一字之和歌
之於其又者何之乎三十一字之和歌
通俚俗文修之人と世ハ俗中乃俗心ハ

事り也久もこころを

辭

古文矜式寄情深而語緩或說文
些兮詞也
或ハ辭と心付ハ詩と證との都を以て三體
ともハ辨之——を漢文の辭を以て何れも
其半を序——其末ハ辭有りて必叶韻の法
を以て先ハ古人の漢文ハ辨之——されど書

漢の編みしは予詠不辭といふ時を倭文の
一作もそらんると赤門の試論有り後の凡俗
乃辭いふるに——誠不淳古ハ文字玉ホして赤
胡ハ手ハ波の玉るるハ辭とハ助語の成ホして
唐よりも日本ハ胡の微情をそせり然らハ辭の
一作ハ後勅有るべきなるらん

風俗

本の系淋しき日ありり系師と楚辭をよむ

にさハ世書ハお布く些方の二字われとも系と
きハ助語の多律をあらきとおろくハ世の世
ありとも唐の音韻ハ通せきも漢文乃
辭於ハ武帝の秋風を始といひて六韻一叶
乃何そいひの中を待愛して發ともうと強
愛して辭ともする騷の愛ハありもあつ辭
の愛ハるそ心けらん系師のいふるらん——物
こト一とひ愛するふを情ハいふらんうらや

柳のさへひららんニさへ愛してをのう二括りら
とよよ五七の法もあつと叶韻の式もあつとめ
とさへく花鳥の風情を忘まぬハ侍らり出
とる侍るあはるる——
此帝此秋風も初なり
て長短を調へ拾り糸ハ何の格ともささめくこ
きりを侍ハ——
楚辭ハと似れらるとかの
形舟さぬら子群臣のあつとむく楚辭の辭乃
字をおおせらるるあつと——
さあや文章の題名

ハハと字くの別解あつとと辭の類をうりハ
その體を經していつまふ字列のささふ——
我
あふ説文ハ楚辭を引く此字ハ詞なりといふ
此ハ辭ハそのれ微情をそせるや或ハ玄句の
外ありともいふと或ハ古今務式ハ辭ハ情深
して語緩——
ハ緩の字をとくむくや文章
の外の平語をいふくとも法格の外乃風推を
あれとあらんあつとてそあまの道理ハもさひて

辭の字別もあらずきさよ永朝の辭ふを古佐
日記あて作勢物格の詞つらひもあてて先ハ
百番の強れそとく能ねえのこやーおこれ
らやととてあらん志ううハ三とひ変ーとる
送理ホーとく詩賦歌の外のととて文法と
あらんさいれとて朝の詩ととて法なり朝の辭
ととてあらん人の玉の強者をもおそれ我
朝の文者もきうつ祿よととてあらん東家の

丘あらんかと永朝ハ永朝をせのーととく
とての世朝の中書王も髪落る詞乃一格
あてハ家も風俗の辭はくうととてあんの風
作ふらんやと後の君子を詩り祿ては辭をそ
ささー作る遠く之卒者也の詞をさう
祿そとくハ遠波の辭をあらんハ

傾城詞

こーのたもとハあらんかひるハ人めも志のまき

かりそかろそ身のはとめちるあんき志のふもに
うさもはくうさも筆舟をのの紙もつきせぬ

馬士詞

坂はさるく・於麻はくめる間の去ら不海はあま
竹舟はあ乃啼うるまらのおり不日うれくや
この返るそやつこもあ

狂云此一篇ハ辞の類の注解とるる一狂
舟楚辞とふ舟を楚玉の人乃楚書をいせり

辞之ハ国東不之イといひココダといひ歌不を
サセともアコスとも助強ハ玉くの風俗あり
去ハ世序もけ辞も句讀の長短を調へるハ
詩賦并江のそあうまて廿七題の外不け括を立
て善く文藝をとうさうとふ

されハ傾城の詞不をワシモコナシモ彼り平治あう
決不むるといひけ藤ふるといふ例丹風桂
の志きさるる中吹不馬士の詞不を後ノ異名

を波の風倍ふしとく十文を雀とひひ三十を周
とふ竹の一字八例の風推まり或をホコモイ
半と八きのまゝぬとゆふをホツとつめさるハ
助倍ふして些方も幸波も安丹知るく――

山姥辞

一休和尚

世もく山姥を生訓志く宿もか――只雲
水をたよりみくしぬ山の奥もか――志れハ
人問ふしきして屋らるる雲此男をか――

の自性を變化して一念化生の鬼女とるやと
目も丹もまとも邪正一如とる時と安鼻是
空その手に佛法の世ハ世法の世煩悩の世
菩提の世佛の世を流生の世を流生の世を
山姥もあり柳をみとるをさくねる山の笑く
さそ人問ふしきとる時と山姥乃推流不
りよ花ののけやまむ童る所不肩をり――月
とろとも山を出て里あくおくる時とる

又ある所の織姫のいををこころに定ま入て枝の
うくひま系なり紡績の糸糸ををき人を
なまくるつきををのこ枝の目母くぬ鬼とや
人の心からん世をうつ蟬のかうををうぬ室不
るををを夜をの月小堀をうちまをむ人のこ
あふも千や万やの礎母をの志をうつはあ
ふ娘のつきをまやがううて世をうつはあ
させ娘くとあふひまをも妾執り唯うち捨よ

何事もすーのー貴のふ娘のふぬううまを
くろーま

和曰世假ハ世不なまる侃あう例母永原の編
母任せく室に辞の一字を加ふ去と而妻の侃
を括く辞の類といふにう侃の中ふを
世假のまをうう人されハふ娘の一冊ハ一体和尙の
作とや世母普くいひ修て古今小希有乃
文法也と強し忽然念起より諸法皆空の道

を示し—魔佛一如の理を啓して柳のみと花
と如く同前の境をひびき—その笑と心字は
結前生後の働きありて相入同と文を流るる
佛理不通せよんを一体おちるは—く文字に
達せよんを一体おちるきん況や花—一体
月小埋れと文章の透同不鼓常をよせる而
後も芳く感まき戻り但—風を解とハ
修徳の長徳母多くきりり

艶詞

姫君例の心ならずくてく—短り絵も足さ—
てうらや—おしまれをうらや—てはく—の
いそそく—あはれきり—をかきあてて外
あるや—ハ意—くやち—は—ハ—ハ—
短ふ赤と一曰え—ま—ぬ—
—お—お—お—
—く—く—く—
—く—く—く—

やう——とひてむつ——は志をらくもちり
くそねとみ——くえり——てハ外もさうも初ま
——人のうらとあハ——ふとあちも世ふうふりう
あふふあふふえまらんとあふそらうここま
とあふふあふえあふハ——まきうのまう——とともかくも
うらあふえあふえまらんとあふそらうここま
あふふあふふえまらんとあふそらうここま
あふふあふふえまらんとあふそらうここま

狂云世假ハ源氏物語の賀乃洞をを定友
ハ題を加ふる夏ハ辰階の賀乃洞の二字を借
きりされハ源氏物語を永野の文章乃禮と
あせらハ筆書ハ縦横の神ありて人情をま
委曲あふまこと云定友——坤——ハ假を定
との源氏ハあふれあふる六十帖の中乃貴爵あら
ん始まハ初き人ハ對——く余初の恨を看るハ
あふ——ハ永く世母在り——とあふ女をま

昔る詞女もあつてまほ笑深妙の平情なるハ息
頭むあつハ女んあつん去身と兔も角もつと
むいせとハ所母松平紙と源氏との浅原をも
知るまきと城ノ其君の膝松ハ盤石を以て
押スル如く源氏もまきと子孫ハ筆力不思後
盤石ハ此阿不甚源の情を汲ム

戲佛辞

鳥丸光廣

善福寺に法を講ハ一磔手半ハ一と圖浮檀

金の法像多し多田の新茶意満仲の持仏
とやそもく愚痴のまねつりあふやう南江
あつて佛八十劫のあふ正をとり給ふあつハ
まきそのまねのあつりもせとく安世世界ノ淨
土をまあけ極重悪人ハ一ハ給ふハ法像の
とふときりあつりまき有馬ハの夕霧
つけて是まその本正了を何とてこれ

瓢箪ハつるとんえとるふと乃

出て胡梅をかまひせらん

と一ハ綺語の結縁もむろく一とてハ決定
性生をとけ一め給ふ一とてハ

枉云此篇ハ光彦彌の有るハ入場の時筆
占とてさるハ行次不書傳て

みえきつゆふはは篇の題名ハ結文ハ綺語
乃二字をるハ此三字をみく題せつ中間乃
一首を辭とるハむも古文の通又乃辭ハ似

く若後一序詞の文勢ハ是ハ漢家
乃辭といふハ但一ハ彌ハ和歌の家もつ此等
の草抄本と好いむつる後丹文法の筆力あり
虚実自在とハ秘まて

憐捨子辭

芭蕉菴

駿河の玉ふ一川の布とるふ三つをくりある
捨子れ何れはは返りいさやは川乃不浪不
りて浮世の波を志のふおたえを露をりの

今あつ同と爰母までとまらん小秋の木の風も
今宵やちるらんちまやちまきんと袂より陰
切あけく通るに

懐を穿入於子に秋の風いづれ

いづれそや汝ハ父不にくまれさるり汝ハ母母
まきさるり父ハ汝をぬくむ不ちるま母を汝をう
とむ母ちるま唯是天母とく汝り性の性
あきををちけよ

在云此辞も漁父の文勢さるり於子に秋の風
いづれと問うけくちまそやと序詞不けける
但一辞の語の一件倭文小辞をまする時ハ千般
の法格さるり一誠や爰士川の流をちまを字
世の波母いづれさるりいづれさるり
小秋のちまを源氏の秋を借り父母の情を
在子う天性をまする例尔和漢の情達ホーく
是をも漢家の辞さるり倭文の脚語を有る

うらとゆふく

夕言辞

東草坊

むー ちりぬ東の人を送るとく武江へ
柴門のあをおーやると東を坊ふ此人ちりく
は別をおくるみはあうんや滋母その人へはふふ
似くそのあを永昨るやとされはむむーを
遠不むーある唐古母とるあありて詞を
とて送る人をよろこひ故をのこく送る人を

いやーむそのあをさる家かふ人あるやさり
とてそのあをやまきふちあうま故にちる人の
ちりぬのささみあうーむーより滋母あさふ
人を一汗の傍をううやとて工高の族ハ妻子
をかちち官福の人と家名をあうーとて世
母ありて佳り旅子あうさうんあうのさりねて
あふふはむむのさま枯志をうくことさむー
くはあうるを武士の旅小行時とさりとて今

今かろらん軍母立付ハ舞ふ事かてーと奴ら
の命も持まーき母ハをのれり門を出るより皆
旅母して旅を忘さるらん小を愛母十流園
のゆきーおやけのゆにちうろそ武陵石
室の旅母おのむり其美云いつき母りあるこひ
さうんはあまのあーまきるふもあつまて人
くは時の名流あて三秋母之夜乃月を疑
せん母を二千里の外乃故人のふとかの三言

ふ乃月を思ひ出らんまーて越後の園をへら
とも故人をらんやの心ありとそい人をうら
柿の一字をゆて東花坊の門人さうんとちきる
母是に支柿乃況りまきく柿の茎れ白きおを
そつるひさや昔梅の江南母あつきあハ風推
寒酸の味をちりて馬祖老倒の器量をと
えつーととー此のふをーて四年誰うま
こやちらんと柿流園よふをちりけてまき

廿二言をお一むのこ

鴨立やその夕れの旅人世をまかての夕景を
それおらしてある譯のをもとみちもつたを
越のうらそれ約之——此中言をまればやとも
狂云廿二言八十三句ありて鴨立の一句ハ終語子
ま八十二句お一て六韻ありてきは八二句合
せて一句の意ある故一六句お一て三韻あり
是れも叶韻の一括とらん之——まきは八二句ハ

去子の句より中江ハ毛詩の三秋を摘とて和
小ハ仲麻呂の秋を去せ漢詩と王维の詩を合
しき梅子の借灯の故夏お一とて師弟の中乃
称名母や總てハ西の東下りお一して定家
のいふ乃陀——まをまらるる中より三夕言乃
詞を合めとて傍借の多きを旅に示るる
滋母文章の奇法と称ま——終まハ廿二言の
辞母を以てて漢文の式を守りて別る倭文

の二作をさぐる法丹初るき流文ある人但一
世序不湖東の人とハ五玉井の序六丹して其時
の文を采門の辞と題しとく彼ら文選の巻
頭丹置ぬを身と辞と題せんハ別尔筆指も
あつんとい辞不湖て論而是ハ爰不い論を
出せるふ也

鳥追辞

作者不知

やんらめてはや千所や万所の鳥追りまひりく

後の辞をいふはこの殿もさくしの村もさくしの
大寺門小寺門寺庭園の寺内不有さるハ産
やう左方ね不右方ね園自殿下鳥おひ是さぬの
鳥追さうおいあよ中右やうね田も四子所
東田も四子丁ありせさくハ千所、坪ある中の枚
のよき不を苗年是さぬの苗代不とあやま
めてあがる田ハれくかひる不不何事を志くふ
よ徳系不福系あろう寺所の事を千本ハりと

こころ所の事を万歩いふると麻毛ある物もはけ
や出—はそ雌羽もあひさう雄羽もあひさう
あろあその上へうたの—もも踏こらう小所—
みも踏こらう毎年の程まきそひ梅を肩ふを
き囁のちうのはまきまきえらう手もまきま馬手
とまきまおふく通るお母返ふてたそれ田の
神あふてたさうさうさうさう苗もよふいの稲もよ
いのそよりお母お口をさうふてそより西—

夕つをさうさうさう返とさうめて一年うらうく
かまてまらね十月山子二月師乞の月を乙月
といふて正月の月をを帝月と称す
の小女帝さうはらぬく小むめ佛法のさうと
そさ女のちいお
柱云此章ハ正月の祝詞ふ—てる返と云者の
農民の門くを云いあうく唱奇く其者ハ昔
説經者といひて龜坂小禪社の流を汲て三

井の迫松院を女寺とせりと今の依て羅と
之者ありん然る母世の分明ありん早九
の者の習ひ傳てて烏馬馬の誤るわくして世
小の武藝坊毎々をニボベニと句讀せり
如く口授の遠い多う人されと此等の文章
をニ思九回して定むべきも亦と亦と母
其文を中畧して法格の外の風格を知ると
ありんされハ其七の借借もなく假名を名に配

もふくニ句長短の柏子もなき小終小風挂乃
情を以て此等を辞の文遣とせハ文章の家
は活けあらんとくされとも此式の禁庭ありも
ありん母や一廳圓新の沙汰不及の中扱ハ井田の
法を以てる組ハ延壽上の淳朴母して上右の
作文とハ足くあり然るを借借の妊婦あり不意小
佛法の二字を以てる妊婦と門くの祝詞あり
て佛法ハ彼り常語ありと云ふべし

翠考之文體明辨云按楚者
詩之變也詩無楚風然江漢之
間皆為楚地自文王化行南國
漢廣江有汜諸詩列於二南乃
居十五國風之先是詩雖無楚
風而實為風首也風雅既亡乃
有楚狂鳳兮孺子滄浪之歌
卒情此字禮義與詩人六義
興風雅賦

頌比不_二甚相_一遠但其辭稍變詩之
本體而以兮字為讀音豆則夫楚
声固已萌蘖折此矣屈平後出
本詩義以騷蓋兼六義而賦之
義居多厥後宋玉繼作並號楚
自是辭賦之家悉祖此體故
宋宋祁有云騷為賦之祖
後人為之如至方不能加矩至

圓不能過規信哉斯言也○古
文矜式云 賦之文貴婉 云
以寄情深而語緩易繫 屈
原楚辭等是也○古文真室
風 註休育云詩變而為騷
變而為 皆可歌也 則風詩
騷之聲而尤簡遠焉者漢武帝
因祠庠土於汾陰作秋風等

章凡三易韻其節短其声哀此
之權輿乎

○梁太子之文選不強於々々屈原の
離騷經と題一其次ハ東皇太一雲中君
湘君等の題名有り末ハ漢父と云る
題名有りて古文真室の漢父 有り
類ハ漢武帝の秋風 と約測明々歸去來
と云ニッをのせり云々ハ戦玉の楚辭ハ

總名其中の騷曲く澹の中の題名を漢
父とせる此母見ゆるる其楚辭の辭乃
字を楚玉とせしめし題名とせる漢の代の
物好キ母やされハ題名故母と作もさやく
ふるりれハ祝詎の如くときもむらるる
去るを白ねたわく捨をさるるにさるる
よく辭と題せる作例おろしひやくち毎の
體をわくる其文體也

一傾城洞と馬士洞ハ其詞の方言を文
母つらて楚玉の辭なり楚辭と名付る
小とつくまねとも去來抄にて世成の
洞なりく穢しくひるまのこくひしと
ありゆるんり類柑子ふ云故爲の奥の細道
見ゆるか涼一さ成水宿不て移まる
ありとせ成け句なり奉白集なりめて昔
妻小いきるる道の紀五日小田系とふ所乃

宿不泊る由きハ玉されの小瓶母酒がー入て
稼ゆくその伊勢母とくきーつらるーの
男母やあらんはひめてさきせちふは二重け
ーめされしーとあらんちちくつあを教
まほられぬー志とけるきささこうち徳を
て云志ちー祿まや中徳心をそれー
旦那のえうはくんとてまぬるれうき
まひふつけて下畧道の記の勢玉治漸く



つるまといつる母つけくさみふ東玉のうみ
くる酒を二白ふーて風流を養されーとそ
らきかくさるさくれとあり
翠々暮る不首本下長唄のあつま下アふ
かふる中ありとおひひらされるささ白とふ
せる旅とらひーとひハ奥ましく二さひハ奥
そぬくーさるを一格とてゆるんすいた
竹る(きよ)や

二不山娃の辞ハ汎ふ物不佛念をのくそ
中ハ風雅あるの一格の好キるハ好ケキも
親世今妻乃強知るん今この世ハそ家
小たよらまはとありハを世成イそ知るま
を幸不仇借者流不ハ方ま後一くや
三不艶詞ハ汎ハ物あくるく微情をそ一
あふよく借後く言外の風雅を以乃拙
を知ら志むる不使りたそと和歌の文あれハ

今の判不をを一
四不戲佛辞ハ和弁の家母も不不あれて
今の仇借母似る文のたる事不を志らせ次不
芭蕉の世き一紀行より切出一て憐
捨子辞と題名を此二章ハ古文真宝不
漢父辞と題名ありく不不序文中間不
滄浪水清兮可以濯吾纓濁兮
可以濯吾足と歌ハ一のち母遂去

不渡輿言とふふ久るうらる漢土と
本邦とに世務をいふをわらうまを序と
見る時を三十一字と十七字とを辞とま
きやむ漢土の辞とくまひ切れて手母お
まわらうく五七五七七を俗語乃句も
初亦不難ひして行飲るれハ五七五手お
まわらうくくふおるれともそや和飲と行
飲のまわらう上に第後に文ある中の五七五

を辞と名つけて第後一文字をまをけ飲
とそそ句とも名をまけく今のまのふふ不
まわらうまを知らるれハくこの好ふと
あまのれと愚案に是をまをくめく
五一又書の辞不まをくまおれと顔と名
つけて假名を用ひたるハ風俗文選李由
序母云まをる鼠賦不五音相應のうかを
めて顔とまは是和文不顔をまをる一掃と

向かうち顔を利用するもよむに其のゆふあそ
くひ自由あるとありてをせ我没後の一
格あわくこのむゆーくや
六十一巻追辯ハ文法もろく只こふ物毎辯
と題をもゆりとあろーむ

右左巻の格をうる級意を考ふる十論
云名人ハ其信不道をおこるひよ其文の
法をひろむ是より道くの建てるべく

師と成りゆふとあるの眞符とんと此故不
風俗の辯の中白ねり の格をそんと
はるるを蓮二つとあはるるゆとありあつたハ
は格とそるハ俗語をむろむる方便ホーて
全くハそろぬるを知りてはるる事とある
一きや十論為年抄ハ万巻の表をすむる
目をぬさきと一理の表を知らんふとさ
是ハ椰子門の書ハ教養せられてさぬく

の事、是る事と禮塔の下、尔、其、れ、は、人
志、る、は、遠、く、八、源、氏、切、決、の、考、く、の、題、名、を、え
て、近、く、舉、白、集、の、題、名、を、え、世、代、の、文、乃
題、名、を、な、し、ひ、て、各、端、に、及、び、其、文、意
尔、心、を、と、ち、か、き、や

銘

礼記註曰敬言戒之辞曰銘
叙名
託銘其功也

記

説文謂一々分別記之盧曰以備
不忘也
或ハ記と銘とも相似とれと記ハ多クを記
銘ハ其意を銘と之ハ一況や銘ハ簡約
て文法所りと記ハ多クハ序詞所りて
所らんハ記とハ各別の所なり但一記と記とハ一
考考るに劉熙叙名卷六銘名也

述其功美便可稱名也 文體
明辨云凡山川宮室門井之類
皆有銘詞蓋不但施之器物而
已然要其體不過有二一曰警
戒二曰祝頌云 珊瑚詩話云
程事較功考實定名謂之銘
文体明辨曰按金石例云記者
記事之文也禹貢顧命乃記之

祖而記之名則昉於戴記學記
諸篇厥後楊雄作蜀記而文選
不列其類劉勰不著其說則知
漢魏以前作者尚少其盛自唐
始也其文以叙事為主云 說
文疏也疏謂一一分別記之
文體小主作之云 出て今の用不所ら
以其中に

花桶記

駢立圃

花と云ふハ一姓の山を思ひ出られ芳姓と
之を云の雪吹の思ひ出らるやよいつきうけ名
の申を清ふらんむう一誰かる標のふ縁を
極くすし世を春の山とふかー久とあり
す心これ志きこく

花云此篇ハ花桶の記ありと或人の書物く
とるうを桶の名を芳野とあるハや然るを
中間一首の古歌を至て前後を序詞の
筆格より末句ハ記の一字を題其
ありく全くハ立圃に記せるや記とせるや
己より記されハ仇偕不記をせ成の序右
記再とるくす記始不古修あうう對乃二
句を至く末句一をあるまを急敬云戒
ありす毎ハ序を書て末句對の二句の文
式と對あうまとも倍二句う四句と漢

文の体不きりあるも——素堂の瓢乃
流ハ全く漢文ホシて未ルを世成の和文
中世是ルハ二人の風柱ホシて一休の例ホ
ありこ——西華坊の著者秘汝村の雲
華園秘詩文の体不きりあると見ゆれと
文多くして安らげ嵐を著る榮碗の秘の
中丹換投早ゆりあるとセツのころ世の世と
皆樂燒榮碗の存ホシて文中の詞ホト

くるふれハ是をきりて体——くる秘とハ是を
ハ文ハちりぬ長きハ序丹——て未ナキ秘乃
句を秘とらるる一きよや又を世成の机秘ホ
陋室秘ホホあるもや法ハ之の秘と文
標ホ出せるもやとりの類名とあり——とや
されハた——ハ是ホを秘とも定めり——
を世成の文を足合せて多端ホと及不極——
くや安丹ハ類よりありハ奉白集乃文

章小さう衣うかひ松木の類名あり是不
あゝるや其角類柑子の文章章小も祢て
える様あるの題名あり

奏表

文選李註表明也標也物之標或
曰驗政夏曰奏陳夏曰表也

或ハ奏表の類とくく君又小奉る奏ハ
佛祢尔捧る告文も預文もと總て此類不入
也一奏表ハ上ノ書牒ハ下ノ觸是或ハ
曰穿小徳者を類ハ紛る物も一但汎論文
を也云の詞ありん小

翠考尔文選李善註曰表者明
也標也如物之標表言標著事
序使之明白以曉主上得盡其
忠曰表三王已前謂之敷奏故
尚書云敷奏以言是也至秦并

天下改為表摠有四品一曰章
謝恩曰章二曰表陳事曰表三
曰奏劾驗政事曰奏四曰駁推
覆平論有異事進之曰駁六國
及秦漢兼謂之上書行此五事
至漢魏已以來都曰表進之天
子祢表進諸侯稱上疏魏已前
天子亦得上疏 釋名云下言

於上曰表 風俗文選不許古為厚子
表何事とことされ言あくと世成乃公あき
さぬあもあひあきを其角り文も韓退之
の佛骨表を嘲とふていつれとけり
あふもあひあき古文真宝一王荊公の讀
孟嘗君傳の例不准ととハ政事とと
古文尔傳の中へ入るも全くハ何とと
されとと文中孟嘗君をきととるきと

ありて其事跡を以てハカク授けり
海して是くの傳と題せるもの傳ふ
と云ふ所の物も亦るは是ホの傳きら
ハ一きハある一きあると表ハ全くと表カ
キハいつに傳ふ一きや支考り陳情表ハ伝
沿の師の書並にさくる文故一ハ云々
西公宗因り告天満宮之告るものハ是又
ありて今や神尔西行の御を一ハ云々

賀の肌をうらやむ伝沿みまのちやを
このむハ稀ある一ハ夫尔とておとびを
のんともうハ好るゆきよと云ふと御の
ありて今や神尔西行の御を一ハ云々

教令

蔡邕断諸侯言教彙訓也授
亦曰令造戒也命也
或ハ教令の類と題して墓教の類ハ勿論也

或ハ寺社の制れをを入ル一教ハ安堵乃教
書キテ今ハ王旨の令令也

琴考る不文世ノ後迎れニ雙林寺修石
碑教と題せるハ徒耳の門人ニ僅從せりと
はたしてまのまのハ今も終ハ一見
ハ巾や利國法親王の命也からくは教つ
くると不文也ありまはハ梨園ハハ莊の志
を去して當時の諱の恐るまはるると云

て古事記の今まの由一くおのハ
まを落柿舎制れと去来ウ也一てお
を一ろくをせ残の三ヶ條も今も一て他
席も亦用る人をもせ残文集ノ仍抑控と
題せるもはた也

書狀

韻會書寫其言如其意也彙狀猶
言無形狀以見人

或書狀の類ふと申状返書ハ勿論ナシト
後文牒状をを入る一後ハ本朝の廻文之
翠考ふハ文體明辨云按劉勰云
書記廣矣考其雜名古今多品
是故有書有奏記有啓有簡有
狀有疏有牋有劄而書記則其
總稱也夫書者舒布其言而陳
之簡牘也云云書ハ和漢ノ多用

みく今按るハ二体あり一ハ作文ニハ日用
之ハ一風流多ク一ハ作文を以てて文づく
ハ一ハ日用を以てて人日用を今ノ俗用ハ
一ハ風流ハ其堂ノ風流乃るハ一ハ一ハ
性也まゝ也たとハ詩人奇人のことハ一ハ
かろやうかきハ詩人のたゞハ一ハ連歌和歌家ハ
歌人のことハ一ハ先ッ漢ハ作文ハ梁を以
の文選の表書牋の類より文章軌竹軌ハ

して和字を採桑拾蕪も日用の漢母尺牘
雙魚同景書のつくひ和字を彫刻
往來古帖揃へり大橋長雄の書れ小也
志るゝ和人の風流ハ書れむき小款よみハ
款詞唐好キハ漢文を交へるゝ少く和漢を
字ハされハ書るゝやへハさるゝの如し今の作
文ハ去來り其角子強る書の一體風流を
用ハせ世の書者皆集ふよやくや日用ハ

流俗の黨へりやうされハ書れむきよてり
多るゝ——まゐるの作文風流を利とむハ
和款侍文母かとうゝ中阿ふ一ツのたのゝ
あるゝの母や文體母ある中蓮二ツ虫狀體
をるゝのゝもゝの多るゝとある半、あれを
安へりやう

申白狂狀

蓮二房

佐七役うけ給うぬ武の極殊より故殿

文福をおくくわしー定る芳世の紀行ハ
筆寫のまふく岩菊丸とありくもあま
うまとい芭蕉を後と辨と二日月記とハ
是より小振治か之中をてあらけ二篇ハ故
籍ニ格ニ文法ある何とそい後ハーくハ
紀行ハいそきい後て後ハ日外中をて啼鴉
集ハ後の中ハ右靴この書棚ハ先昨も
加筆のをさうー出ー一帯と帯ふ不疑ハ其

故ハむとあれハ後ハ秋ハいそーて
麻も紅糸もちりく小糸と初めと後
けさるあまく秋ハあまやををいそさる
辨ハ所の拍子とあれくハ世のあれ？
れとそーも糸月のをを忘まやばさると
ハ版母をを忘ままで表老の觀を秋ハ
いそ辨母其時ハさハと驚ーハ今あま
のとあてさ母を能さくハ今あまの文法ハ

のるたよハ法善う読んでらして人の為乃
有り亦を志するこく今と一は讀ふは二句
みるんハ人の骨節をみるぬらん人の骨
節をみるんハ傀儡と云ふもの不獲ふ一きを
かきお粉をよそわひて固ちの人をたから
うまのあゝゝゝんやいゆるふ門の虚をた
はけ等の死活おもひつゝらん蓮二も吾子を
その医師を失ひく此道場かもいりあるあ

やまちをう仕出—うまらとらまきくおそれ
入のれと乃文者をもはけは活ひそち二句
小を死活わけて文章の拍子をも志つゝらん
一の篇に要を志らん小をその文法の迷を
あこまひてと程まなひはふ—一完賢

狂云世世ハ尾城不便をおて武陵一書
通の活かしむけ書の統ハ後乃序の
類のり子通曉ま—されハ法善う読

と八世人ハ常ニ洗滌を以テ人の丑を去
腑を照して其病の在不在を知らんとて
但極隣と故縁の從事ハして小派治ハ
百里の姓氏ありと何れも先師の旧識也
翠云蓮ニ書まはく古縁とハ芭蕉の事
ハして先師とハ東菴坊よりと東菴も蓮ニ
と交考り名ふれとかり先師の文よりみせる
よし文澄序跋の終語鶴葉跋四季乃

うらまゐるをさぐる中ナ

秋ハ初秋の心さハゆるニ日月のゆくをた
るゝ秋七夕あり魂をうつニ秋のありけハ
又ささり菊に下すの啼く来るは秋葉
きりまの秋をさすのきり――麻も秋葉も
秋のちりくふは世のさぬのかきとさ――
も秋葉の老の忘れやうきさる冬ハ初時
ぬきやうの極むらきの心をわくさまり

ぬるを小妻のなみか— 古采るまや

葦二り文— 東洋舞の加筆を称— しく死語と
いひ傀儡乃ちをいひ文— 魂の入るを文世
舞老乃観くま— しく世成の文ふをま
りりまをを魂をま— 待欲作文のち
くをいひこつ風推をの扇んとあま—
を世成の文— 形くもま— しくいひ
くるとも鬼— おいひ— しくいひ

葦二り道場ふ— しくあま— しくいひ
まとおま— しくいひ— しくいひ
— しく世成の文の魂をいひ— しく
文筆の拍子をま— しくいひ— しく
くま— しくいひ— しくいひ— しく
とま— しくいひ— しくいひ— しく
ま— しくいひ— しくいひ— しく
の筆持はま— しくいひ— しくいひ

本朝文體おのひとある時の文もさうし文
體の末より一世紀のちをいへば年ハ享
保三成年にして支考め十三を前後に
り又一拍子と魂なきのちやまちあるもさ
れと一旦披露の上よりハとく改人ホと
むつりくつとを急より入る門人を早く
さす再りさむるもこのれハを修さし一室
あるつく文體九をハは一通りおほふとや

いんまてくハ支考の文章不致乘する
その多かれとを素をらんく難きその
りまてきつとを書きより眼を閉りされハ
越人りふ猫他のも忽を笑ふとく如くある

對問

説文對應無方或曰从寸寸法度
也韻會引説文曰問訊也聘也
或ハ對問ハ文章を先申して理論を後する

と云ふ一一同者八回を設け對者八對を設けて
文法一類を在るを破るハ雅凍ハ理論を
先にして對同を理論を後にして之を
本朝文稱不々對冊と云ふ

案考ふ不對同の名題ハ文稱不出と云ふ
文選不と文操不も云ふ一云ふハ云わて
一檢を云ふ不と及云ふ一云文と理と
先後を云ふ文を先と云ふハ文不と

云一云訓明云答客難云云云原云漢
文辭不も同答の云むき云云云ハ辭乃
題名不と云云云云云及云云云

日記

説文日記往來也紀與記同私曰
日記二字本朝多用記日用謂也
或日記の類と題して其終号の二記を入ル
一或ハ紀仍と云時ハ日記の中不入ル云也

總て記の類とハ各別也

孝考ふれば胡ノ古き書之の古伝日記
阿佛丘のいさよひ日記と今の紀行とを
外ノ日記ハ和泉式部日記山家式部日記武
家ノ盛長日記ホリテ是ホハ旅多クぬ
日記とく信阿ノ日記の事と日記とを
をせ城ノ伝録日記ハその文つたて
俗事ノ日記とハ各別ノ日記と題せる物

文選文選文操との出さる文選ノ終
焉の記を出さる世戎の海中の事を其角ハ
あるをその支考ハ加筆ある物ノて日記の
形句論ノ人々の伝形ノと日記の事ハ
浩の文ノて記をもあると多利あるハ
旅の日記あるノ一然るに紀行と題せる物
照明子子の文選韓柳文白氏文集文
明辨詩人玉屑おもるノ一東坡詩集ノ

紀行と名目せる詩九十二首ありけり其の
たる時の詩二首或ハ三首ありて其の
仍の字をあるせる詩の題詩の序乃
如き文ありて平朝おもちきハ古依日記十六
日記海道記抄ありて源親仍り紀行とせる
ありて外正廣ハ日記と一宗祇ハ此世宗道
記と一玄旨法印も道記とを宗長と
東海の行と一紹巴ハ及士見記と一

とせ成の如き一紀行と一此紀行を題
名ハ後人の付たる物あり其の細道ハとせ成の
題名而て宗長の東海の行と一とるあり
つる物あり鳥丸光廣ハ東玉下向の日記を其の
曙と題名あり鳥丸光榮ハ正享元年仲小
東海及
本号也紀行と一とをこり書ホ一と下ハ紀行と
ある物ありと一ハ題名光榮ハ舟や文と
後人の付たる物あり西山宗因ハ陸奥紀行と題

せるなり是木の柱を見合ていつきふり
て題名まきり又文の面ハ和奇並其れ
くの體時代くの形りまきふりもつて
それの中の近く光後ハ光榮ハの文術と
に歴まきりして純潔の文に和款乃純
とち入媚るとハ却て格別ある物と深く
見るべきとわらふ縁と先ツを友ハと宗因
の紀乃自身室の須磨一見鬼貫うらり

紀乃古徳の若根湯入れ紀乃不角の本曾
の麻衣ホを足合まきり——是ホハ他つ不き名
の者よりまきり他つ不の文とを世城の文と
いふるまきり形りつるやと見るまきり又
芭蕉門不も其角の新山家嵐雪が杜撰
集支考の鼻日記東和松竹を外多く
諸日記見る一はれとまきりをもとりまきり
その人とまきり時ハ初心不ハ却らむ世城の文術を

石のふくまらるる岐路多しと云ふ

碑文

説文碑、豎石、紀功德、祭義、運載、當用木也。或ハ碑文の類、ハ碑の銘、墓誌を之ニ總てハ、序ありて其銘其誌を之ニ一ニ墓誌の倫ハ、碑文の類の下、ハ、翠考、ハ、文体、明辨云、按劉勰云、碑者、埤也、上古帝皇、始號封禪

樹石、埤岳、故曰碑、周、穆紀、跡于弇山、之石、秦始皇、刻銘于嶧山、之巔、此碑之所從始也、然考士禮、入門、當碑、揖、註云、宮室有碑、以識日影也、祭義云、牲入麗于碑、註云、古宗廟立碑、繫牲、是知宮廟皆有碑、以為識影、繫牲之用、後人因於其上、紀功德、則碑

之所從來遠矣而依倣刻銘則
自周秦始耳後漢以來作者漸
盛故有山川之碑有城池之碑
有宮室之碑有橋道之碑有壇
井之碑有神廟之碑有家廟之
碑有古跡之碑有土風之碑有
災祥之碑有功德之碑有墓道
之碑有寺觀之碑有託物之碑

皆因庸器彝鼎之類漸闕而後為之所
謂以石代金同字不朽者也故
碑實銘也銘實碑文其序則傳
其文則銘此碑之體也 初學
記云碑悲也所以悲往事 考
るに風俗文選に金碑 芭蕉 笠塚碑 李由と
あり李由の文ハ其體を以てこれと云ふ碑ハ
姓古の人の文ありて其碑を以てするに世政の

文也碑の跡み入るハ何々々又考るに碑
又つらて建る事後世亦名史をおのふ似
されハ蕉門小このむつき母ハ何々々と師法を
つとんとまざる門人の信を捨る母志のひま
してハ何々々きくされと名をいふ母魂の
んをくもてハき文ノ一を情を碑ノ一を安とハ
ん何々々々きふやえせ故ノ碑文の作らるハ
文選文選の一二をゆく

文選

文選塚碑

李由

江東平田邑光明遍照寺の地ノ先師をせ成
翁の文選塚あり十四世乃傍某蕉門不入ノ事
をつむる事二十余年身ハ甚甚微々ノ塚ノ
をノハ何々出の事何々より言ノ一胡ハ何々書を
彼一タアハ何々句を練て推敲を定むる事
行るむノ一芳何々何々の母してハ何々の何々の

をえせうけ竹柱の口を東坡の心えをうらやむ
月乃ちみこふまふ時ぬ教のいろめ—きき書を
候られくる侍もふつ—とて死後ふはまを
えうけ終へて中母こあく門人各二句を
けてかの塚は日—く納む世不報恩を候し
とる長橋小尾花塚深門不敷句塚越中ふ
翁塚本若塚八直—造骨を葬る地より
されは西の塚とく玉く—年残—るも

は終るらんちまう—と死後の門人師—まえん
えぬる成るりく子なれをやく世塚—
来り季れ、奴をかけく—句をうてまつ
ハ生糸の門葉ふひと—く—とオ子書由
字買年謹てこれを書ス

文澄

芭蕉翁石碑銘 并序

東華坊

承師の伊賀の玉小生身して美意の心と

後堂の家母はくふを先を枕地の堂とつや
今の氏ハ松尾を中より年まゝ四十の志を
あゝと武陵の深川小世をのりて世ふ芭
蕉居乃翁とい人のとてえや——
居——道へつめて今日の變化を——
恍惚はあそひて竹柳の役をおむとつ——
されハ松島ハゆふの——笑ひ象深き
ゆふのぬく位とつて富士——程乃又

對して吾ふ一字のゆま——とハ右をくくを
今を城——あゝの初をそ源ゆまふサと世の
秋なれて難波の浦小世を足してむまゆと
祇を月の中れ二日よりりさるをゆまの布と
アふその竟をとめてかの本看ち乃世の下
の千筆の名ハ朽き——東洋無坊あゝの
此碑をたぐる事ハ松阿西ハ法線をむま
ひてあふ七字の心を傳へま

其銘

あつさろ	まきーの國	名ありあふ
世母深の	まきのこ	人母ありの
ちりー世の	まのまひま	あつさろに
その玉川の	みふかこの	水のこ
くもてーる	まきーま	まてあふ
流るまきハ	ぬり川や	け世をまの
をまて結て	その陰のむ	まのまの

いつ林風の	やうり	そのまを
とさーまきぬ	まをかえの	人もまぬ
ををるまの	むとさく	花のまの
まてまぬ		

碑陰 維石不言
謎文以傳

ね云此碑ハ洛東の双林寺母存りて銘あり
乃墓ありて但一平朝不偃名の碑乃始

あゝんり其年八宝永宣のまゝとされハ此
秘ハ三十一句なりて起結ハ假名の韻を用
るに中間の古二句ハ七字の謎ナリて其二句
亦も首尾の韻あり然ハ序詞の故ナリ此
より或ハ故義の行状も或ハ石碑ハ謎文の排
と或ハ其秘の助語預辞も此等ハ一軸乃
秘徑を加へて彼寺の内陳ハ身納まを百世
の識文ナリて爰再往まゝ不思なりんハ但

叢語ハ系師と清て續む一編終ナ
参予吾道といふ人を呼々けり法華を
翠云李由ハ三塚ハ文のミナリて東洋坊ハ
翁の碑ハ末ハ秘有の傍也

圖司墓誌并序

野盤子

出好の玉好玉乃林藤ハ圖司なるナリといふもの
如くをわり一りて墓石の中ハミを旅と
て聖店の月ハ橋の影とて思ひぬるま

院つくー武の芭蕉庵ふさひ祿ーてハ志を
く林の忌部をおーと後の桃花坊丹かり
かーてハ妻のやうく来らん子をまらその
まといさずあらんやとハ大和路の道ふりぬ
ありきよー程の契と見ゆきーと今より
めき思ひ居るふむ月の末より庭あきゆり
何のおつらやともあてまもきまーまは日
ある不終い身あがりたりーらりあはは身ハ

門母待くき子さくあつてー妻さゆと美く
ゆりその愛ふたぬはま子あつて此後まを
たらんハ先や人をうーぬ屋ーさてやハ浮
雲流水のちふあふらんまーきまゆり
今ハ誰くも思ひぬハそのはを安んず
人ハあはれあつる子向もおふらーハあハ浪子
とありてひとし母寄をたれむとらるまーて
は文の哀情あらんけ日ハ阿蘇不男せられて

彼ら廟前の香篋をさくる小おのく短尺
不名を題して墓誌の情をそふ

當歸よりたれは塚のまこれ草 芭蕉庵

唐一好いさくこやまの古の下 西原堂

死み来てそのきさく死の花の子 野柳子

狂云墓誌ハ文選ハも論あり死生年月を徳
して秘文のたるとは考ふるとんゆきと今ハ
仕助り墓誌ハ教つるや序詞の外ハ誌文を

出せりむ後劫ありきとされハ誌文の三系ハ
當歸ハ孟厚り詩を念そ花の陰ハおのの
款を摘く西原堂ハ厚ハ頓挫乃抄とゆふ
一ハゆきも切字の口授ありて故翁の友文字
ハハ論あり但圖司ハ其姓ハ一て名ハ呂九とい
えり出所の玉の郷侍らうとそ

翠今案るハ文選ハ劉先生夫人墓誌
あり是仕助文ハ墓誌乃中に死生乃年

日ふ——之文の末に玉て寂寥揚冢參
差孔樹毫未成拱暫啓荒埏長
扁幽隴夫貴妻尊匪爵而重を
書をされ八圖司の墓誌に旅するなり死
日を志るを是ホ々文章軌範の柳子厚墓
誌銘を韓退之にかけし死の年月を志る
まふらふあり——其文の末に銘曰是
子厚之室既固既安以利其嗣

とあり是ハ子厚の舅弟盧遵が將經紀其
家ホらて退之にけるおく是序の詞乃
外に句をとるのよりとらるるハやま外
惜乎乃人ホららハ按とまらるるやま外
沈潜ホらて其まくホとホ及是ホらて
是るまきやまらとらるる我まのまてま
時を信ふまホらホら刻——後世ホ
傳ぬるハカ

弔文

文選為弔祭類也弔問之義也私
曰可言以書而訪問也

或ハ弔文數冊を祭文哀文ふと視誦文也
爰冊入之——但此類ハ死期の哀傷を述べて揚ぐ
法格冊がけりさうんり云ハ得又の教ふと不突
りてく倭文の自由をみさんともい等し和
漢乃名別をさくく文章不私さうん不也

祭今案る冊を世故の弔古戰場の文風俗
文選より受る其の細意の中の切出しふて
そ文ハ何れあるとんゆる数句の洋編ハ其考
のり冊入今ま——其外文選より李由り
遷化不許亡り断法の文も李由り聖皇是祭
乃文も文遣り渡る程り弔許亡文も北七里の
生身魂の祭文も祭るの字と只弔まるとの
御のりてハ弔祭の字義よりよりてともかくも

ありてく風痛文ハ説法傍の遊至のよのよ
 文物て穂倉不圓向のよふ風痛さるふと
 ありてく文物ハ常の文章乃ちるふふふん
 或ハ誄といひ原といひ冊といひ詰といひ菜園
 いひ彈支といひ岩以てく倭文の名再ありて
 女より倭文ハ漢語を和むる時ハ文字の容
 けり其郷言ハふゆありて—此考を文選の字格
 とせし況や原人原道乃名をや

考考ふ字彙 誄同調 誄壘也 壘
 前人之功德 祝辞也 あり昭明太
 子文選ハ誄多く有風俗文選是ふよりて
 嵐菜誄 芭蕉 文州 誄 去來 誄 許六
 仍ありて去來 誄 ありてハ誄と題するは
 ありて—支考ありてハ誄よりてありて
 是を世談の誄と題せると其角りらる若
 系集ハ悼嵐菜詞と題ありてありて

さる方おとやうなうんうさふ下冊のたふひ
を考ふよろく用をとも可也

箴

詩経註以礪刺病也曰折前夏之
失也

孝考ふふ箴ハ文體ノ一或此説フ一閑居
箴 芭蕉庵と仰ろくを經テ自己の教訓
を箴する首尾の文法を尋るべきなりと仰る

いつ多ふ箴をたふすの文多し

尋到源頭云箴之所作乃夏禹
作蓋箴者取規諷之義若鍼之
療病也後人有箴始 文體朝
辨云其品有二一曰官箴二曰
私箴大抵皆用韻語而反覆古
今興衰理 之變以垂警戒使
讀者惕然有不自寧之心 文

選陸棧文賦箴頌挫而清壯銑
曰箴所以刺前夏之失者故須
抑前人之心使文清理壯也
文式云箴宜謹嚴切直

論

文式論宜曲折深遠也或曰反覆
盡夏情也

但設論ハ對問の形より論の形へと接を

一、文道の客難賓戯をてハ傍へて他者の
筆格を人然るに連珠類と題名有りて名ハ
題名の類へハ何れハ文格の中へと入るべきや

李考の李性學文式云論理貴
反覆而尽事理也又曰論宜曲
折深遠 文體明辨云按字昏
云論者議也劉勰云論者倫也
彌倫羣言而研衆理者也論之

立名始於論語

翠考其風俗文選文選文採不篇の類
名の文の是ととと世の如か子一昭明を
子の文選不は題名を是と今の佐治文不
まわく入るはくや儒佛を是と一して備
まるとは是とる変あるはとそれと唯識
論不異論の末書あるをおりいとはとれ
天倫菩薩もいといとありは佐治の佐治は

嬉談乃論の子活不とまきれて非学考論
不有まの流不と似と人唯を世のい
利害を破却して老恙をてされく不
あらんを老のあといとハ心論はれと
あるとあの一はくはや

解

文心雕龍解釈也 莊子有角刀牛
字義也

或ハ論と解とハ各別の執るゝ論は解は
理有りて書きてる身ハ其文ハ紛々として論ハ
究てお對する物を論一解と大むき一物の理
を解と論ハ意く物をむつゝいひつて曲
折深遠ハ論と解とを論と解とを論と解と

翠卒考の文ハ明辨云按字書解者
釋也因人有疑而解釋之也楊
雄始作解嘲世遂倣之云云禮

記經註解者分析之名○文心
雕籠五書記部曰解者釈也解
結滯徵事以對也昭明太子
文選々題之古文真宝ノ獲麟
解進學解有り風俗文選文選文探小解
文の事とをせ成の文ふ一其外あり是為
らぬ志れハ志ぬくこのむ返一くや然否文作
明辨云與論說議辨蓋相通与とも

何事ハいつ事ナモ何事ノキヤ

傳

韻會史氏紀載支跡以傳于世或
日記其姓名也

記

說文謂一々分別記之盧曰以備
不忘也

或ハ傳と記とも相似されと人の起るを傳といひ

物の起るを記といふ等の通理を故實と
とらるゝ或ハ傳贊も傳の起る之

考考之文體明辨云按字書云

者傳也紀載事迹以傳於後

世也自漢司馬遷作史記創為

列傳以紀一人之始終而後世

史家卒莫能易○昭明太子文選

ハ傳贊傳論と題せるハ何事と傳とを云

古文高室ノ陶淵明ウ五柳先生傳柳子
 厚ウ種樹郭橐駝傳ウ中朝小ウ法然
 上人沙僧唐孫在 編多事西山上人傳後唐孫在 一品親王 号
 何ウクテ文の長短何キトそれウイキテ
 七絶云々ウクハ一ウ風俗文選ノ東
 順傳モ世次の地ウキハ役トキキヤウウ
 中ノ五帝ノ帝傳モ字傳モハ支共ノ字由ウ
 何ノウウヒテ今文世人をホウウウウウ

ハモ世次没後の流ウウウウウ方モウウウウ

辨

說文罪人相與詔也文式互方折
 明白也

說

文賦註曰辨口之詞明前夏虛誑
 感人心也
 或說と辨とハ物の理ホを二合一テ明辨小説

分る初ハ相似と云ハ虚証の理を以て人の
心を感動一辨ハ實有の理を以て其妄を
辨別是れハ説辨の二様ハ各別也倭文ハ虚
實の取違ハ

翠考尔文體明辨云按字書辨
判別也蓋執其言行之是非真
偽而以大義之也漢以
初無作者故文選莫載而劉勰不

著其說至唐韓柳乃始作焉然
其原實出孟莊○その類々唐ハ
出とれとせ成の文ハ其類あると云ふ
の題せると後人の題せるともあるとき
小や倭の他語みとた人ハ其辨ハ辨別
ふとの意ハからくんくわくを
のつとみとるものみあるとき
説ハ文體明辨云按字書説解也

述也解釋義理而以己意述之也說之名起於說卦云更出己見縱橫抑揚以詳贍為上而與無大異也云云○文章歐冶云說以說理貴明白而不煩解註○字彙云說輸切解也訓也述也又輸芮切說誘以言也人使從已也

考考之輸芮切音セイ也古文去室爰蓮說をセイといひあつたまふれ八周義、爰蓮説も韓之師説も人ノ説くをのれ不あつた志むる稷秦張儀くくひ小や甚んをるをうと一世人の耻学於師といひ牡丹の後考するを世人のまむるをうとあつたともい柳子厚く韓愈をうとす不韓愈不顧流俗杞笑侮收召後学

作師說因抗顏為師愈是以得
狂名とやふのふくハ鮮義理而
以己意述之也と云ハ字義小より
て人をお手フハとるはくやをせ成フ因
因説あり

頌

朱子詩傳頌宗廟樂歌美感心之
形容也

贊

字彙佐也明也文選有傳奇入曰
論贊也

或ハ贊と頌とも似たる所ありて意を似
純ハ異なり頌と万物の形容を頌一贊ハ大方
人品を贊をを字義小甚道程ハるれとい等
も故實と知るべきなり但讚の字も通用也

吾輩考ふる文體明辨曰按詩有六

義其六曰頌頌者容也美盛德
之形容以其成功告于神者也
若商之若那周之清廟諸什皆
以告神乃頌之正體也至魯頌
駉閟等篇則明以頌僖公而頌
之體變矣後世所作皆變體也
其詞或用散文或用韻詩亦
辨而列之又有哀頌任昉所稱

漢張紘初作陶侯哀頌者是已
今其文雖未及見而竊竒骨
與哀贊畧同姑以俟博聞者

○風俗文選小仇浩頌孝妻切頌酒德
頌石白頌所者其抄の法をいとも非小
告休者不所きて古文志室下劉伯倫酒
德頌ハ酒の法をいとも大人先生といふの
の以天地为一胡といふ如きホキ人の法不

託を王子淵の聖主得賢臣頌も漢宣帝
の徳をひそくるを石臼頌のとき水情乃
物不頌をゆるハ文体明辨尔

木蓮頌

江菴

并采泉壑騰光淵丘緇碧

艷桂列山人結侶靈俗其

時至不採為子淹留と作

るるを石臼頌ハを世成の作らるる

越人の作くと不猫蛇子と云ふを世成

頌と題するものか——又古文を云々 元次

山の大唐中興頌と古文真宝抄范

至能題中興碑詩后曰頌者美

盛徳之形容以成功告於神明

者也商周魯之遺篇可以槩見

今次山乃魯史筆法婉々含譏

蓋之而章後來詞人復發明呈

Handwritten text at the top of the right page, likely a title or header, written in cursive.

露則磨崖之碑乃一罪案何頌
之有と何り云れ、唐人走之如朝哉うく
今何事も安らふを好むる心よりいふ
此係りてはとくむきとハらざる物も美
盛徳之容以成功告於神明者を頌と
頌まきき丹也

享和元年六月

不辨之好
生福
